



foodescape!(フーズスケープ)
foodescape!は食べものを意味するフードと、風土や風景を表す
ランドスケープという言葉を組み合わせた造語

「食べることに興味がある人も、さほど関心がない人も、
いっしょに楽しめる『食のイベント』をしかける堀田裕介さん。
斬新な表現方法で食のあり方を考える企画が、
若者の『食文化』に新風を吹き込んでいます。」



EATBEAT!(イートビート)
お肉が焼ける音やキャベツの千切りのリズム
など、食材が発する音を重ねていきます

Profile
1977年生まれ。3歳から豊中市在住。飲食店、カフェ、飲
食経営コンサルタント会社勤務、調理師学校講師等を経
て、2005年からクリエイター集団“graf”でシェフを務
める。現在は、foodescape! bakery/coffee/cateringを主宰
し、幅広く活躍中。2011年度には豊中市ふるさと雇用再
生基金事業の中で「種から育てる子ども料理教室」「子
どもカフェ」を企画・運営。



料理開拓人 堀田裕介さん(浜在住)

道を拓く おいしく、楽しく、華やかに 「食」の大切さを伝えていきます

「食べる」ことの意味を ともに考えていきたい

現代アートの祭典「瀬戸内国
際芸術祭2010」にも招聘さ
れた「foodescape!」。
その土地の魅力的な食材や料
理をテーブルに絵を描くよう
に盛り付け、華やかな食空間
を創り出す、堀田さんオリジ
ナルのケータリングスタイル
です。芸術作品のような盛り
付けと、その土地の食材の味
わいに加えて、普段出会う機
会の少ない「生産者」と直接
交流する機会も用意され、若
い世代を中心に支持されてい
ます。



種から育てる子ども料理教室
次世代を担う子どもたちに、実際の
農作業を通して、「命の循環」を伝えたい

出会った人の数と 移動距離が創造の源

そして、いま取り組んでいるの
が、音楽家のヘンリーワークさんと
の「EATBEAT!」。様々な調
理音を素材に即興で創作する音楽

と語ってくれました。
「出会う人々の数と移動距離に比例
すると思うんです。全国各地に出か
けて、それぞれの土地の特徴を知
り、素敵な食材と巡り合い、たくさ
んの生産者たちに出会う。それがい
つか熟成して、新しい「何か」を創
造できるのではないかと思います。」



(※)エルダーホステルは、1975年にアメリカの
大学で始まった中高年齢者を対象にした生涯学
習プログラムで、「旅」と「学び」をキーワードに、
大学の寮などに宿泊して様々な講座や体験プロ
グラムを受講し、学びと交流を深めるもの。

情報を求めてきた人を 手ぶらで帰さない

豊後さんがライブラリアンとし
ての専門性を本格的に追求したの
は40歳代。図書館学を体系的に学
ぼうと、大学の講習に参加。家事と
育児の時間をやりくりし、司書補
の資格を取得。英検1級、通訳案内
業試験にも合格し、キャリアの幅
を広げていきます。

一方で、現場のレファレンスでは
「情報を求めてきた人を手ぶらで帰
さない」との意気込みで、研究資料
を求める利用者からの要望に、あら
ゆる手を尽くして応えました。

豊後さんを講師に招き、講座を企
画したこともある元図書館司書で、
現在は国際人権団体の活動を行う
奥田八重子さんは、「仕事をもち女
性として、目標にしてきた人です。
情報は力、情報を得ることは人権
と、その支援を实践された姿が印象
に残っています」と話します。

学ぶ喜びをみんなと 分かち合いたい

50歳代半ばで、原爆詩人として
知られた妹の福田須磨子さんを看
取った豊後さんは、本格的な高齢社
会となる日本で、高齢期に入っても
学び続けながら、自分らしいライフ

スタイルを築いていく仕組みやモ
デルがないことに気づきます。その
時、ふと思い出したのが、かつての
アメリカ人上司から受け取ったク
リスマスカードにあった「定年後
にエルダーホステルに参加する」と
の近況報告。

昭和57年に、自らエルダーホステ
ルを体験するために渡米。ボストン
では、大学の寮に泊まりながら受講
し、国立ケネディ大統領図書館の
ワークショップにも参加します。そ
こで、参加者の活発な質問のやりと
りで、議論が広がっていく様子を目
の当たりにします。日本のことを知
りたいアメリカ人高齢者が多くい
ることも驚きました。こうしたアメ
リカ人高齢者をぜひ日本に招き、国
際交流、生涯学習を通じて世界の平
和を共に築いていきたいとの強い
思いが生まれました。

帰国後、受け入れ団体を探しま
したが、引き受けてくれるところは
なく、それならばと、自ら講座を企
画して実践することに。昭和61年、
エルダー国際交流協会(のちにエ
ルダーホステル協会)を設立。数多
くのアメリカ人高齢者を招き、「国
際交流の会」とよなかなどの団体の
協力によるホームステイや、「大阪
府老人大学(当時)」との交流を通じ
て草の根の国際理解も促進。25年
間にわたり、日米の中高齢者に多様
な学びの機会を提供しました。エル

ダーホステル協会の創設に参画し、
現在は観光まちづくりの専門家と
して活躍されている大社充さんは、
「知的でエネルギーが豊富で、おちゃ
めな一面も持ち」とその人柄を話
します。



アメリカ人高齢者の
第1陣を出迎え(1986年)

25年間で、アメリカ人4,300人、
日本人11,100人の交流を支援

人を援助することで
社会に貢献する

こうした活動に共通するのは、情
報と人、そして人と人をつなぐライ
ブラリアンとしての生き方。「おい
しいケーキ屋さんを見つけたら、人
に教えてくれる。一緒においしさを
分かち合いたい」という気持ちがい
つもあるのです」と話す豊後さん。
人を援助することで社会に貢献す
るヘルピング・プロフェッションを
長く実践してこられました。

95歳となった今、週のうち数日を
高齢者施設で過ごします。そこで偶
然かつてアメリカ文化センターの
利用者だった男性と再会、昔話に花
が咲いたそうです。図書館での縁
が、高齢者施設にまで続く平和な
時代になりました。人生の様々な節
目や場面に、図書館が存在する。そ
んな平和で、文化的な暮らしがこれ
からもずっと続いてほしい」と静か
に語ります。



アメリカ文化センターで見学者に
説明する豊後さん(1960年)

してもらいたい、と考えるように
なったと言います。「都会暮らしの
若者に「食べる」ことは生きるこ
とにつながり、よく生きることは暮
らし方を考えることなのだ、伝え
ていきたい」と堀田さん。

と、その場で作られる料理とのパ
フォーマンスは、五感全体を使って
「食」を楽しむことができる話題
を呼び、「おいしく、楽しく、華やか
な」イベントとして食に関心がな
い人をも巻き込んでいきます。